



へ13  
1301  
2

# 天目防蓋之底

辨與

吾孺下五十三賦卷之貳

○ 弟二版



津の巻



宗小修終者親喜院へ行念の功ひはしかり後河も  
 時欠弓矢の巻まに悦指の一矢の元へ念成院(幸の  
 以極立而へ念くせあひしより親喜院が中不実り  
 その途よりしりしきくましく以妙法のおりしり  
 の莫念をいれし賜りうきうきより親喜院大  
 るい念を大付の紙よりゆりん終ひの酒者科院

さる坊うら殿りかじし中郷の久門にわけく  
たぐらうアある雪でふも是もあへ切こお思れ是に  
おざりま千のうらく、  
あひてもけ雪で着の子一丈  
高くと是と買て来まこと提義の候実出して  
解らる白雪成れ入紺地のも拭き料理よふは  
加減黄ぐしくぬく  
よしと今日のお雪でい着もあつた尾ひまのあつたの  
あつたあつたもあつたあつたは兼ともあつたあつた

ふつふつとせうとよん赤の飯も焚ねあつたは兼よ  
と鳴きまきて次の房より  
の牙子小僧年ハ十二う三の  
けあつてもとと中うにきりくと帯の結び目も  
ふも八丁利口者ともあつたあつた  
後いのもうらうゆへは着も  
振舞やうと久由と二人して着も  
飯も焚くくまことバ久由モ  
どんるお目出とふらあつたま」と才、

そよそよと風も知つての風うけとて今も此の  
法寺法山と勅命ありて此の終りもいと受よその  
終りもいと終り此の終りもいと受よその  
是のさつごらと終りもいと受よその  
同中細言の娘もいと受よその  
自殺して夫もいと受よその  
あつたおけ大伴と我修辰もいと受よその  
つまの親善院と此の終りもいと受よその  
愈あんとて終りもいと受よその

つりくちとあつた終りもいと受よその  
終りもいと終り此の終りもいと受よその  
あつたおけ大伴と我修辰もいと受よその  
つまの親善院と此の終りもいと受よその  
愈あんとて終りもいと受よその





女盗賊  
の六  
親喜院  
と殺  
園







せよふあつど是と烟伏そとあつどつりのとあつて今  
 用ゆるん始めくあまど果してそつへのちあつて律を  
 自らの情指と容易く烟伏あせしるふを後といつま  
 修りつりアラなるしくとおゆるそつりつるあつて  
 志ま女の智た里とあつて是に化舞下のつる  
 此れの者け大書に難義仕まると一夜の島とと地を  
 久しゆきて門口の角面白あつて酒の中明きのの  
 氣のあつ瓜あつての碑が破る難義へつらちのゆり  
 ともくついとあつけあつてつとあつてあつてあつて

此の家とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ともくついとあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 音流があつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 久しゆ女の前れそつるながひ大書あつてあつてあつて  
 門へのまてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 志まあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 掛るあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 志まあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 と久助がせらぶよとあつてあつてあつてあつてあつてあつて

門かどのあやしくいゝやわおもかもきざりけさるく  
けちへ遠とほくし中ちゆうと後ごとと体たい足あしさうし中ちゆうまアと  
刃やいばもど美うつくしひねれどあけれゆきのるたささくけ  
方かたへともとみく後ごい入いまひねれももれとく四よへ  
入いれ大おほ香かし雅みやび系けいしと後ご系けいまう一ひと族ぞくの富とみの山やまをん  
とけしとる娘むすめとさか河かよりまうて今いま香か一ひとよさ  
山やま後ご謝しゃとけし中ちゆうまをきりうのりうと山やま用ようとまて  
せめての山やま後ごひよか破やぶまうと後ごしませうと後ごて香か  
る回かい舎しゃ内ないへある者ものといふられぬ別わかれとあはしと親おやき流なが

うらめばしてうてうてん天あま宮みやへのけりぢぢけ餅もちちり  
一ひと口くち喇ら酒しゆと搦なつと見みた見み味あじ酒しゆやあぢなるんの獨ひとりり酒しゆ  
今いまの久ひさ曲まが法はふ策さくも意いの邪よこへぞとあふより久ひさ曲まがとよひ  
を付つけイヤ何なにもあそちぢをわ者もの喚こゑるんの味あじしよと  
つらぶが意いおは法はふ策さくぢぢり味あじしよとあはははのて酒しゆの  
物ものへけよ又またよまら國くに者もの後ご味あじしよとあはははのて酒しゆの  
と酒しゆもさめく志こころ中ちゆうまけ方かたへるぬ日ひくれがけとあはははの  
改かへるんの味あじしよとあはははのて酒しゆの  
呵あはりけりま久ひさ曲まがへふせうぐのわくまづり新あたらしうへい

ツイ新中屋を何うあつてはにわき門の戸明けくぬく  
出そ中を路なく、押うが旦那の金程をうけ事の  
あの中を態く改うとゆへでもよひて是が中をう  
後より後子と地所を、あつてうねへ才、そやと玉是  
よりそ此新うま親善院へ法兼もたまふて死多  
業務を引うせくらせつ多うと見色一う交  
く法兼よりやこの赤の飯とお三階くに申して  
そち方うあへん時うう十五年のそる世後う改か三  
たくしや者も何ぞ見つてううて酒もコレ後う何ぞ

扱くつうくこのと申付らまアイトと着人もううと酒に  
着と赤飯くか三が方へと出くゆく改うあまあり親  
善院も扱あつてよ又く何しがあ人が押うぬうちと  
押のひ定めく此れのも改改く引うすればいもうも改  
ぬいあがひの扱と改うる風情うて田舎者ト申と改ま  
あつらんか昭あへといふ親善の親善院何のあふつて  
よんりのつま実態うその中人。イコくそれいひて  
おさんそ中をく改ざんして田舎者ちのまじり  
目うの付申といふのうぶしとくあつて多那親會

ともその中の中うまゝと殺すのちつとりめのい又とあひ  
物とくとあそぶるうまゝの臺よつまつて物  
作天そらとのけや、押をりしあぐまやまあいで仕合と  
物うごちつて復座極へのせらるゝんえつて破の破れだん  
そのなまも重うの何ぐ遠入く物うやまへいしよんせ  
てちさんせとあはるゝ押のけくやあぶあひとくよと  
けつちのめつてようん海らせられぬさうちるのよとあふんせ  
りやあひさうこうころまひ一寸んせくと出てもあひ  
のけつて是くともあひさうさうあうけはあひのめてあそ

うの毒業の功終成物成まはれを海く終つてし  
うくあうしんを毒業と中んせんあおあうあぬがは  
せんな物成物と居く着もを毒ふあつてうとあは  
中うのあまはしん。イヤモウそりて一あは海とよあう  
毒まやうらとあひまらうとあはあうの海と  
ちうらとあひまらうとあはあうの海と  
あはあうの海とあひまらうとあはあうの海と  
あはあうの海とあひまらうとあはあうの海と  
あはあうの海とあひまらうとあはあうの海と  
あはあうの海とあひまらうとあはあうの海と  
あはあうの海とあひまらうとあはあうの海と  
あはあうの海とあひまらうとあはあうの海と

み雛いと抱つてお尻を修し引よせくうの帯とほく  
ぐろくまきよみ付らま親善院の目づらわちくこりや  
どよまるとりみ取表のうさうどろくと入る親善の  
皆一形の黒お装束親善方是よあさうゆらりオ、今料理  
かろおさしてその料理の献立のホレのお茶漬同様に  
小判ぐ三百両丸のお六が喰およう骨おぐのま献  
立してその坊の料理中うん。々幸ひるは毒菓是と  
吞しと様して足中うとりむ子下ぐ立あさく被蓋の  
蓋お掛け親善院がけよ所て無理よ是と吞しとふよと

お六おたごころゆらせらるる居る日七瀬八瀬  
親善院の想ち想身はまきのとおおつと死てよりお六の  
所形よお名をあらう毒の刺目のあるのんどのみさのよ  
一。つくとおれきせる多茶粉揃よく大膽名飲女  
まきまらるは業うり

○月限の下

おろくとつど竹らや舌の口を口にと差親善院  
又二人の百粒あんとおぼくえんをでいひつ  
言の考の貢と中う来年の考他ぐ味のほら





そとへ一 至るべく藤のさかすかもまきまき  
年寄ていけ大書より内書よりあつてもあつて  
あへと何さうめく藤のさかすかもまきまき  
内書親書院名のお教で今夜の樂くと松本付せし  
あつてふあむあむとつて立て日光浴とあつて  
はさうな書あつてつてお教の法書もあつてそのせむ  
おつらうのせむり又世し中お教あつてつてあつて  
くとあつてつてあつてあつてあつてあつてあつて  
ある淡紙色の中あつてあつてあつてあつてあつて

アノおつてあつてあつてあつてあつてあつて  
今から十三年あつてあつてあつてあつてあつて  
つてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
拂る自願とあつてあつてあつてあつてあつて  
清を求め侍末祐親名のお教あつてあつてあつて  
右大お教あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
いつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
んでせぬあつてあつてあつてあつてあつてあつて



實はけ春蔵とて子が男なりぬ我世は出さる  
ういぬるはまはたんとてゆづらせらまは  
畢射とゆは流三葉小娘活宗をと申人の御て  
流られ下まはしが運梅とて娘は流の  
そふ梅とて終はそらあるはまは  
お流と驚風でぬるまはは時のだらがはは  
も文更とてある男の子とてあはるお  
おま人と同い年名ありおは南村の  
あるは川家の門の殺りも加りるは身  
例

そらく実張うあさあまはゆすの  
世と申る甲斐もあはははははは  
よむとてあははははははははは  
娘と孫と一時は死にて年らおあま  
院友の門はははははははははは  
とあははははははははははははは  
てあははははははははははははは  
あはははははははははははははは  
娘はははははははははははははは

りぬ後よい〜して孫の中よ〜あつて居るア〜ア〜  
あ物〜このいそ肘のお墨舟と家をと申うのおはる  
今文あんなわがあても何の役も立ぬる部てわと  
と見るおに後の終より申とお云際〜ア〜お  
信り家て法兼おうなつ〜何う一石案終〜お云  
おお向いおく〜支る毒の毒を吐〜じ〜が申うお終  
終ら〜終〜して居るも浮世ありやおまへの申う〜お  
孫〜終〜して申う〜お〜い〜い〜し〜と申うも浮世  
是もあ世の中〜と締め〜今日〜酒〜

香〜香〜を〜は〜長世〜で〜間も〜さ〜め〜極め〜して今  
一登〜ら〜と申う〜藤〜ら〜申う〜法兼が〜ま〜め〜く〜し〜け  
に〜立〜働〜してす〜ひら酒下地〜い〜好〜あり〜西〜を〜い〜よう〜お云い  
あ〜ら〜りに〜似〜け〜く〜おの〜が〜信〜る〜お〜あ〜く〜と〜は〜る〜く〜わ〜ら〜う  
砕〜け〜く〜立〜も〜立〜ま〜ん〜を〜終〜し〜例〜を〜是〜り〜」〜寄〜張〜の〜元〜お  
あ〜ら〜りと〜藤〜親〜逃〜像〜提〜婆〜が〜あ〜る〜十〜徳〜の〜法〜兼〜は〜は〜は〜は〜  
〜ら〜と〜突〜張〜供〜ふ〜く〜お〜根〜う〜ら〜る〜濃〜紙〜色〜を〜は〜は〜は〜は〜  
冥〜き〜と〜ら〜く〜と〜見〜い〜う〜も〜お〜云〜が〜い〜つ〜ま〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜  
此〜墨〜附〜三〜乗〜宗〜近〜の〜短〜刀〜是〜こ〜わ〜ま〜は〜オ〜そ〜ま〜と〜や〜と





吾輩下五十三駅卷之二終

が言ふたりんであへん  
 むのうまのけこりや  
 南を阿蘇池と友人が  
 吾輩の

吾二天

